

「教職実践演習」(中学・高校)における「哲学」

大西 勝也

1. はじめに

「教職実践演習」(中学・高校)における受講者の「話し合い」の現象に注目し、その現象の中にみてとれる教育についての「哲学」(「哲学すること」)について記述してみる。この記述は、これまでの自身の「教職実践演習」(中学・高校)への省察に基づくものである。記述は、個別の事例を取り上げるのではなく、諸々の事例を貫く「話し合い」のある特質を抽出し、一般化したものとなっている。

2. 「教職実践演習」(中学・高校)で展開される「話し合い」

「教職実践演習」(中学・高校)(全15回)では、教員が設定した大テーマ(例えば、「道徳教育」)について、受講者が主体的に学習を進め、最後に、その学習の成果をプレゼンテーションするという流れとなる。教員の「講義」や教員の司会による「話し合い」も適宜行われるが、グループによる主体的学習が時間の大半を占める。グループ(5～6名)において大テーマに関わる小テーマ(例えば、「道徳の授業におけるアクティブラーニング」)を設定し、グループ学習が主に進められる。グループ学習の形態にはいろいろなパターンが考えられるが、ここでは、グループ内で行われる「話し合い」について注目する。「話し合い」は、受講者からの要望がある場合、もしくは、教員が

情報提供や教示を必要と判断する場合以外では、基本的には教員の介在なしに、展開していく。

ただし、「話し合い」はいろいろな局面を経て展開する。一定の調子で歯切れよく進むというわけにはいかない。ある時は間延びし、手詰まり状態に陥り、倦怠感とその場を支配したり、別の話題にそれたりすることが生じたりもする。しかし、しばらくすると、本筋に話が戻り、急に何かのひらめきが生じ(1)、いつの間にか話が深まり、ある結論にたどり着く。非連続の連続とも称すべき流れである。

3. 「話し合い」における「哲学」

「話し合い」において当然、テーマ(大テーマと小テーマの双方)について多様な考えや意見、疑問などが立ち代わり入れ替わり表明される。とはいえ、それは一度に表明されるものではなく、それぞれの表明には時間的ずれがある。そのずれは均等なものではなく、ある意見が表明された直後に、それへの疑問が出たと思うと、しばらく沈黙が続く、疑問への直接的回答が出ずに、別の視点から新たな意見が出され、それに呼応するかのように、それに類する意見が立て続けに表明されたりする。この流れはパターン化できないし、予測もつかない。

「話し合い」の内容に焦点化すると、「話し合い」の時間の中で表明される考え・意見には多様性がみてとれる。そこには、もののみ方や捉

え方、関心のもち方などの差異が投影されることが多い。「話し合い」をみていくと、それまで様々な考えや意見の表明が続いていたのに対して、そもそもそれらの考えや意見の根本にはあるみ方や捉え方があることに気づき、それらについての指摘が表れてくることがある。み方や捉え方を追求する問いかけ（疑問）が引き金になることもあるし、み方や捉え方についての考えや意見として表明されることもある。問いや疑問には、多様な考えや意見を導き出したり、多様な考えや意見の内容の論理的整合性を図ったりする契機となる場合と、それまでの「話し合い」のみ方や捉え方、いわゆる視点の転換を図ったり、視点そのものへ関心を導くための契機となる場合がある。み方や捉え方についての指摘が生じる引き金となる問いや疑問は、後者の場合といってよい。「話し合い」には、考えや意見にみる多様性が現出する。さらに、考えや意見の依って立つみ方や捉え方の多様性に光が当てられる。自分のあるいは他者の考えや意見のみ方や捉え方を問い、考えるというのは、まさに、「哲学」（「哲学すること」）の一つである。それは考えや意見を支えるものへの関心から発する。善悪について考えているときに、「そもそも善悪を語る自分の判断はどういうみ方や捉え方の基づくのか、そのみ方や捉え方はどうして自分の中に形成されてきているのか」と問いは思惟の深みを求めて展開し始める。「哲学」とは、常識や慣習、既知の真理すべてを批判的に、自らの反省と直観を用いて自分が納得できるまで問い続ける営みでもある。

「話し合い」の中に現出する「哲学」はこれだけではない。「～とは何か」（本質を問う）、「何のために～をするのか」（目的を問う）、また、「なぜ～なのか」（根拠・理由を問う）といった問いとそれに対する回答をめぐる自立的思考（自律的思考）も「哲学」に他ならない（2）。例えば、本質に関する問いでいうと、「道徳とは何か」、「道徳性とは何か」、「善と悪とは何か」、「アクティブラーニングとは何か」などであり、

「目的」に関する問いでいうと、「何のために道徳の授業を行うのか」、「何のために道徳の授業でアクティブラーニングを導入するのか」などであり、また、根拠・理由に関する問いでいうと、「なぜ道徳は存在するのか」、「なぜ道徳教育が存在するのか」、「なぜ道徳が特別の教科になる必要があるのか」、「なぜ人は善を称え、悪を嫌うのか」、「なぜ人は悪を行うのか」などである。

しかし、上記の問いに対する回答は、すでに著名な思想家をはじめとする先人たちが個性的に提示しているし、現代における教育に関して、多くの人によって発せられたそれぞれの知識・情報や知見に様々な回答を見出すことができる。「教職実践演習」（中学・高校）受講者たちはこれまでの学習の中で、そうした回答をある程度知っている。学習指導要領やその解説書などに記述されたことがらは、少なくとも知っている。それでは、その記述内容を回答として確認すれば問いとその回答をめぐる「哲学」となるのだろうか。それは違う。事実、そもそも、受講者は確認で済ますことは決してしない。一つには、受講者は確認で済ますことは欲しない。あくまで主体的に自分でその意味を捉え直すし、その回答と意味内容が重複しようがしまいが、自分の言葉でその意味を語ろうとする。二つには、受講者は既知の回答では説明しきれないところに注目し、それについて自ら問うことをはじめ、自ら回答を産みだそうとする。「哲学」とは、主体的に、自立的（自律的）に、自らの反省と直観によって、問いを定立し、それに対して納得するまで問い続けるということである。そのプロセスの中に問いとそれへの回答（取りあえぬ回答）があるのであり、「教職実践演習」（中学・高校）の受講者は、既知の回答内容を確認することでは決して満足せず、その「話し合い」のプロセスには必ず、問とそれへの回答を主体的、自立的（自律的）に遂行していく。これは、教員が前もって指示したり、「話し合い」に介入したりしなくとも、

自然とそうなっているというのが現実である。教員は「話し合い」が始まったら、受講者から知識・情報や意見・助言・知恵の提供を要望されるとき以外は、一般には「話し合い」を見守る姿勢で臨む。「話し合い」の始まる前と終わった後、教員は、適宜必要な、受講者とのコミュニケーションをとるのだが、そのコミュニケーションなくしても、受講者は「話し合い」における「哲学」を毎回、自主的に体現できている。それは「教育実習」を経験した受講者だから教育について関心のあるテーマを設定すればおのずと学習できるレディネスができているからか、それとも、「教育実習」同様にこの「教職実践演習（中学・高校）」の単位を修得できなければ、まもなくの卒業に際して教員免許状を取得できないから、否応なしに頑張るのか、あるいは、1年次からそれまで履修してきた授業による興味・知識圏の拡大深化や技能習得および「履修カルテ」による学修のふり返りによる省察能力の向上といった学習成果によるものなのか、その辺の事情はわからない。こうした事情については、別の機会に考察してみたい。

4. 「話し合い」の場への支援

以上のように記述していると、「教員の役割は何なのか」という問いに突き当たる。いくつかの最小限の役割を記したが、言葉を足すならば、受講者が最低限押さえておく最新の知識・情報や考える手がかりとなる文献等は用意しておく必要がある。「参考までに」、「関心があるものだったら」、「もしよかったら」という程度で見える形で示しておく（例えば、最新の書籍等を広げて置いておく）やり方は、受講者にプレッシャーを与えることなく支援することの一つになりえるように思う（3）。受講者の希望・要望があったらそれに応えるようにするのはあらためていうまでもない。もちろん、もっと硬派なやり方で支援するやり方（ある程度、知識・情報や課題を一律に与えしっかり指導したうえ

で、教員がリードする話し合いの時間を十分その都度取り、そして、受講者どうしの「話し合い」に時間を設定し、その時間を支援するというサイクルを毎回行うというやり方）もあり、「話し合い」をどのように「教職実践演習（中学・高校）」の中に設定するか、選択肢はいろいろあると思う。小論で記述した話はそうした中の一つにすぎない。ただ、その中に受講者の「話し合い」における「哲学」がみとれることにいささかの意義を見出し、それを記述したということである。

（続く）

【注】

- (1) 金子晴勇 「対話の構造」 玉川大学出版部 1985年
- (2) 「価値」や「当為」に関する問いとそれへの回答も「哲学」（「哲学すること」）に含まれる。
- (3) フィンランドのボイオンマー中学校の「地理」担当のエスコラ氏が自らの授業の哲学について質問を受けた際に、「私はとにかく生徒がプレッシャーを感じないように気を配っています。その方が実は地理の内容を教えることよりずっと大切だと思います。できる限り、自然に学べるリラックスした環境を与えようとしています。」と答えたことを想起こす。

NHK BS1「変わる世界の学力マップ～教育21世紀の課題～」

2003年5月17日 放送